
軌道

小雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軌道

【Nコード】

N5464J

【作者名】

小雨

【あらすじ】

同じ時代を生きる人たちへ。

「小山さん、今日遊べなくなるかもしれない。また連絡しますよ」
信人がそんな事を言った。

騒ぐのが好きな彼がそんな事を言い出すのは珍しい事だった。
その日僕は、信人と鳩を見に行く約束をしていたのだ。

鳩を見に行く。

多くの人にとって鳩という鳥類はわざわざ見に行くものではなく、
自然と目に入ってくるものだろう。

平和の象徴などと大層な呼ばれ方をしているが、現代においては駅前や公園に行けば大抵うろついており、それほどありがたさを感じない。

一般人にとってはわざわざ見に行くほどのものではないが、しかし彼の場合は少々違っていた。

純粹に鳩が好きなのだ。

僕はというと、別に好きでも嫌いでもなかった。要するになんの感情も抱いたことはなかったのだ。信人と出会ってから、僕は一般人が耳にする一生分の（あるいはそれ以上の）、鳩に関する情報を手に入れたと思う。

僕はその日、参加しているプロジェクトの会議が予定されており、あまり余裕がないスケジュールだったため了解した。

遊びに行くのは構わないのだが、僕も一般人と同じ。鳩にそれほど興味はないのだ。

信人とは同期入社だった。

彼は頭が良かった。単純に知識が豊富というだけではなく、彼が本

当に頭がいいと思うのはその柔軟さにあるように思う。

頭が柔らかく、機転が利き、空気を読む。

このプロジェクトに信人ではなく僕が抜擢された時は驚いたが、何のことは無い、彼自ら打診を断ったそうだ。出世には興味の無い男だった。

信人は、独自の価値観を持っているようだった。

こういうタイプの人間は、物事の本質を理解しているんじゃないかと僕は思う。

世界と絶妙な距離感で付き合っていけるのだろう。

プロジェクトは難航していた。

試験運用に入った新ツールに、致命的なバグが発見されたのだ。ただでさえタイトだったスケジュールはさらに厳しくなり、開発者達は帰宅できない日々が続いていた。僕は開発組みほどではないにしても、スケジュール管理や顧客への進捗状況の説明に追われ、終電で帰宅する日が続いていた。

その日も会社を出たのは、23時を回っていた。

週末であったため、ほろ酔いスーツ姿の男性をたくさんみかける。街はまるで、祭りか何かが催されているようだった。路地に目を向けるといたるところに吐瀉物が撒き散らされており、僕は顔をしかめた。

僕は飲み会というものがあまり好きではなかったし、よほど気を許した仲でもない限りプライベートで同僚と会うのも気が乗らなかった。

飲み会で楽しそうにしている同僚や上司の気持ちがよく分からなかった。

僕は何か食べて帰ろうかとも思ったが足が向かず、満員電車で押しつぶされそうになりながら帰宅した。

2

次の日は休みだった。

休みではあったが、少しでも仕事の負荷を下げるため、会社にこそ行かないにせよ何もしないわけにはいかない。

僕は昼頃起床し、トーストとインスタントコーヒーで簡単な食事を済ませた。

何となくベランダに出てみると、旅客機が空に浮かんでいた。どこに向かっていているのだろう。僕は少しの間、多くの人を運んでいるであろう鉄の塊をボーっと見上げていた。

以前信人と海外出張にいった時の事を思い出した。

彼は飛行機が苦手で、乗っている間は身動きひとつせず拳を握りしめて一点を見つめていた。

冷や汗をかいており、精神的に相当疲労したようだった。

ホテルに着いた翌日、彼は鳩に乗って大空を飛び回る夢を見た嬉しそうに話してくれた。

苦手意識というものは不思議なものである。

そういえば、結局昨日は信人からの連絡無かったな…思い出したが、あまり気にしない事にした。

このプロジェクトに参加してからというもの、体重は減り続けた。た。

思っている以上にストレスがたまっているのだろうか。

僕は夕方頃で仕事を切り上げ、少し外に出ることにした。

Tシャツにジーンズ、サンダルといった、ラフな格好で、携帯電話は置いて行った。

社会人になったばかりの頃はスーツが窮屈で仕方なかったが、一週

間のほとんどをスーツを着て活動していると嫌でも慣れる。人間は慣れる生き物なのだ。例えばそれが窮屈さであっても。例えばそれが無茶苦茶なスケジュールだろうと。

夏は終わりにかけていた。

ひとときわ暑い夏だったが、それ以上の思い出は無かった。ここ数年、思い出を食いつぶして生きているように思う。

新しい記憶が更新されないのだ。

昼間は残暑が厳しかったが夕方になると秋の匂いもしはじめ、何となく近所の公園まで歩いてみた。小さな公園だ。

少し喉が乾いていたので、缶コーヒーを買って公園のベンチでぼーっとしていた。

昔は缶コーヒーなんて好きじゃなかった。しかし今ではなぜか缶コーヒーを買ってしまう。決しておいしいとは思わないのだが。

しばらくベンチでぼーっしていると、ふと公園の入り口から女の子が出て行くのが見えた。

少女には見覚えがあった。確か妹の幼なじみの子だ。

あまり仲はよくないようだったが、何度か家に来たことがあったので、見覚えがあった。

真っ白なワンピースが、夕暮の日差しによく映えていた。

確か、由紀ちゃんっていったっけか。

彼女は高校に行っていない。いや、正確ではない。彼女は高校を卒業していない。何かの事情があって、中退してしまったらしい。当時は近所でも話題になっていた。

本当であれば大学二年生くらいの年だろうが、今は何をしているのだろうか。

どうせ当てもない散歩だった。

僕は何となく彼女の後について行った。

僕の住居は都心から一時間ほど離れたところにあるアパートだ。以前は家族と住んでいたのだが、二年前から一人になった。

温泉に向かう途中、自動車事故で、死んでしまったのだ。後ろを走っていた居眠り運転のトラックに追突され、そのまま押しつぶされてしまった。

僕は仕事にその知らせを聞いた。何がなんだかわからなかったが、現実を受け入れるしかなかった。何がなんだかわからなかったって、時間は前にしか進まないんだ。

公園を出てしばらく歩くとY字路があり、右に曲がると急な坂が現れる。

坂を下るとさして大きくない川が流れており、その川を境に住宅街が急に終わり、田んぼが広がっていた。

彼女は橋を渡って行ったようだ。

夕暮の少し涼しい風に当たりながら、僕もぶらぶらと歩いていった。田んぼの中に公立高校が建っており、部活動に打ち込む生徒達の声が聞こえてきた。

僕が通った高校ではないが、学生時代を何となく思い出した。

学生時代、僕は陸上部だった。

中学時代はサッカー部だったのだが、団体競技が煩わしく感じ、陸上部に入部したのだ。

陸上は、さすがに練習まで一人で言うわけにはいかなかったが、最終的には一人で戦う事になる。

周りの余計な事を考えないでただひたすら腕を振り、足を回す。性に合っていたようだった。

走り始めてから次第に何も考えなくなり、自分の呼吸の音だけが聞こえてくる感覚を、僕はずっと忘れていた。

意識が完全に高校時代に戻りながら、僕はカーブを曲がった。

僕は目の前に急に現れた白いものに驚いて、現代に戻ってきた。

彼女が立っていた。ちょうど小屋の裏になっていて、僕の視界からでは気がつかなかったのだ。

目と鼻の先に彼女は立っており、僕は驚いた。

今更出あるが後をつけてしまったような形になり、何か罪悪感のようなものを感じて僕は動揺した。

と、彼女が笑った。

さわやかな笑みではない。もっと何か、背筋が寒くなるような笑顔だった。

僕は慌てて彼女を追い越し、なんでもなかったフリをして歩き出した。

彼女は、高校で何かあって、壊れてしまった。

以前そんな噂を近所で耳にした事があった。

僕はその手の興味本位で飛び交う噂話が嫌いだったので余り耳を貸さなかったが、ふとそんな話が頭をよぎった。

日はもう落ちかけていた。カエルの鳴き声の中、僕は再び川を渡り家路を急いだ。

週明け出社した僕に、嫌な話が飛び込んできた。

現在取り組んでいるプロジェクトのクライアントが、予算の大幅な削減を提示してきたというのだ。

予算の話は随分前に詰めて合意していたはずだし、相手が新たに提示してきた額は余りに少なすぎるものだった。

その日は書類の作成を終わらせなければならなかったのだが、そんな事を言っている場合ではなかった。

書類どころか、今まで積み重ねてきたものが無駄になってしまう可能性もあった。

僕は急ぎ客先に向かった。

結果から言えば、クライアントの内部の問題だった。

試験運用が始まってしまっているにもかかわらず、話が全て上まで通っておらず、承認段階で止まっていたそうなのだ。

結果、予算を大幅に削るよう言われたとの事だった。

クライアントの担当者である鈴木氏は簡単に事情を述べ、提示した金額で対応するように要求してきた。

僕は、提示された金額だと予定されていた物には程遠いものしか納められない事を説明したが、とりあってもえなかった。

先日発見されたバグの事も影響しているのかもしれない。

鈴木氏は不遜な態度で、さっさと席を立てて行ってしまった。

僕は肩を落として客先を出た。

提示された予算内で収まるよう、再度提案しなおさなければならぬ。

鬱々とした気持ちで、僕は地下鉄に乗った。

帰社すると、そのまま部長に呼び出された。

当然小言を言われると思っていたが、案の定予想通りだった。

初めて任されたプロジェクトという事もあり、部長とはきちんと情報共有していたつもりだったが、部長は一方的に叱責した。

それだけの事をしてしまったという意識もあり、僕は黙って聞いていた。

同僚達が周りで聞き耳をたてているのがわかる。特に、予算が少なくなるという話をしたときに、ざわつくのを感じた。

一通り小言を頂戴し状況を説明した後、ようやく自席に着く事ができた。

僕は荷物を置き、ひと息つこうと思い喫煙所へ向かった。

喫煙所には信人がいた。

「あ：お疲れ」

部署が変わってから、仕事中に信人と話す機会は減った。それほど話していないわけではないのだが、なんだか懐かしい気がする。

「小山さん、禁煙したんじゃないですか。それにしても疲れた顔してますね：大丈夫ですか？」

このプロジェクトが始まった頃から、僕の短かった禁煙生活は終わりを告げていた。

僕は信人にも状況を伝えた。

「それ、どう考えても相手側の情報共有ミスですよ。こっちのミスも影響しているかもしれないですけど、それは小山さんの責任ってわけでもないですし」

初めて慰められた気がした。

「後で部長にちょっと相談してみようと思うんだ」

右も左もわからない中でやってきたが、このままでは先方を納得させる事は難しいような気がした。

今までががんばってくれていた社の人間にも申し訳ない。

「あの人の怒鳴り散らすばかりで無能だから、相談するだけ無駄だと思いますけどね。相談するなら同じ部署の経験豊富な人の方がいい

んじゃないですか。小林さんとか」

他部署とはいえ、部長を無能呼ばわりしてしまうあたりさすがだと思っただ。しかし確かに、部長の評判はあまりよくなかった。ハウレンソウを叫んでいるくせ、状況を把握しているとはいいがたい節がある。

もつとも、部長もオーバーワーク気味なのかもしれない。

「そうしてみようかな…ありがとう」

「いえいえ。あ、そういえば僕今週末からちょっと実家に帰るんですよ。おみやげ何がいいですか？」

信人の実家はN県だった。地理があまり得意ではない僕は、N県の特産品と言われてもすぐには思い浮かばなかった。

「まあ、なんか適当に。じゃあまた」

僕は憂鬱な気持ちで、オフィスへ戻った。

週末まで、激動のようだった。

カプセルホテルに泊まる事も何度かあり、心身共に疲れきっていた。部長は、今回の件で僕に対する信頼を大きく失ったようだった。

中間報告をした時に、理不尽とも思われる叱責をうけた。

本来であれば報告の時間すら惜しかったが、僕は疲れきっており、黙って聞くのみだった。

「やっぱり小山にはまだ無理だったか……」

自席に戻る僕の背後から、そんな呟きが聞こえた気がした。

クライアントには、提示された予算で可能なギリギリのものを提案した。結果、大きく規模が縮小され、設備的にもかなり中途半端なものになってしまった。

最初の構想とは大きくかけ離れてしまったため、ある程度の赤字は覚悟しておかねばならないかもしれないかった。初期投資としては悪くないかもしれないが、手痛かった。

クライアントへの報告を終え、ひと息つけそうだった。

相変わらずの最終電車に揺られながら、週末は久しぶりにゆっくり寝ようと思った。

翌日、昼過ぎに目が覚めた。

ずっと寝ていたかったが、そういうわけにもいかない。寝貯めできない体が恨めしかった。

ここ一週間まともな食事をとっていない気がしたが、食欲はなかった。

僕はそのまま布団に横になって本を読んでいたが、すぐに活字を目にするのが嫌になってやめた。

二度寝しようかとも思ったが、一度目が覚めてしまうと起きられない体質だったため、諦めて起き上がった。

カーテンを開けると、いい天気だった。

空は晴れ渡り、所々に千切られたような小さな雲が飾り程度に浮いていた。

この空のように心が晴れ渡っていたら、どんなにいいかと思う。

なんの心配事も不安も無く何かを楽しめた事など、しばらく無いような気がした。

僕は頭を空っぽにしたくて、ぶらぶらと外出した。

ボーっと散歩する事しかない休日ってどうなんだろう…だめだ、何も考えるな。

先週と同じ様に近所の公園に出かけ、ベンチに腰かけて缶コーヒを飲んだ。

コーヒは、おいしくなかった。

少し歩こうと思い、僕は公園を後にした。

当ても無い散歩だった。

普段密度の高いコンクリートジャングルの中で仕事をしているので、地元に戻ってくると安心する。

今までずっと地元から出たことは無かったが、今でも地元に残っているクラスメイトはどのくらいいるのだろうか。

ふと昔を懐かしく思った。やはり僕は思い出を食いつぶして生きているのかもしれない。

そんなことを思っているうちに、田んぼ道のほうへ足が向いていた。Y字路を右に曲がり、坂を下る。

気持ちいい秋の日だ。歩くのは心地よかった。

坂を下り、川が見えたあたりで、ふと橋の上に人だかりができて、る事に気がついた。

高校生達が数人たむろして、橋の下を見ている。

何かあったんだろうか。僕は橋の方へ向かった。

「何かあったの？」

僕は高校生の女の子に聞いてみた。

「あれ…」

彼女は橋の下を指差した。
するとそこには、由紀ちゃんがいた。

由紀ちゃんは、泣きながら川の中で何かを叫んでいた。

そんなに大きい川ではない。膝上ぐらいまでしか深さは無いだろう。って、そういう問題じゃない。

由紀ちゃんのお母さんも下にいて、川岸から由紀ちゃんの名前を呼んでいた。

お母さんは泣いていた。

僕は見ていられなくなって、下に降りていった。

「あ：小山くん：」

「どうしたんですか。由紀ちゃん」

「わからない：もうわからない」

由紀ちゃんのお母さんは、力なく首を振るばかりだった。

僕は川に入り、由紀ちゃんの前に立った。

「由紀ちゃん、大丈夫。戻ろう、あっちお母さんもいるから」

僕は何を言っているかわからず、よくわからない日本語で由紀ちゃんに話しかけた。

由紀ちゃんは尚も泣き喚き続け、水を激しく波立たせた。

誰か助けて。何もわかんない。誰か助けて。

由紀ちゃんを岸まで連れ戻したあと、僕はお母さんに家に招かれた。

「ありがとうね本当に。私一人じゃどうしようもなかった」

僕は何も言わずにコーヒーを頂いた。

コーヒーは、コーヒーの味がした。

「あの子、昔はあんなじゃなかったでしょう。高校でちょっと色々あって、学校いなくなっちゃって、それからずっとあの調子で：」
僕はあまり由紀ちゃんのことには知らなかったが、彼女はかわいい娘だった。

「由紀ちゃん原宿でスカウトされたらしいよ！」なんて、以前妹が

言っていたのをふっと思い出した。記憶と言うものは不思議なものだ。

きっと、彼女には多くの悪意が向いてしまったのだろう。それが彼女である必要があったのかどうかは知るところではないが、僕には何もできなかった。

コーヒーを飲み終わり、僕は家路に向かった。

家に着く頃には、辺りは暗闇に支配され始めていた。

支配：文字だけみるとどちらも悪い意味には取れないのに、組み合わせるとマイナスイメージになってしまうのは何故だろう。

人はみな、何かに支配されている。

自由であった事なんて、もしかしたら生まれてからこの方なかったかもしれない。

しかし、何かに支配されている感覚を覚えず生きていた時代は確かにあったのだ。

僕はいつしか、そんな感覚があったことさえ忘れていた。

人間は幸か不幸か、多くのものを忘れて生きていく。忘れてしまった事すら忘れて。

週明け出社すると、部長に呼び出された。

進捗の説明なら全て終えていたはずだ。一体なんだろうと思いがらも、部長の下へ向かった。

「おはようございます」

「ああ、小山くん。きみ…有給どのくらい残ってたかな。例のプロジェクトも一区切りついたことだし、少し休んだらどうだ」

有給は、一回も使った事はなかった。使いたくないわけはなかったが、スケジュール上使う事ができなかったのだ。有給を買い取って欲しいと、何度思ったことか。

「はい、それは構いませんが…それでは今のプロジェクトが終わったらまとめて休暇を頂きたいと思います」

「ああ、それな…」

部長は何か言いくそうにしていた。いい予感は、しなかった。

「もうひと段落したようだったからな…後は小林君に任せてみたらどうだ。彼なら経験も豊富だし、以前クライアントの方とも仕事した事あるみたいだからな」

僕は啞然として、固まってしまった。血液が引いていくような感覚がある。

「…つまり、」少しの沈黙の後、僕は口を開いた。

「つまり、僕はもう降ろされたという事ですか」

ようやく搾り出した言葉は、震えていたかもしれない。

「そう言ってしまうとアレなんだが…今回の件では君も疲れただろうから、ゆっくり休んでもらいたいんだ。小林君ならうまくまとめてくれるだろうから」

部長は小林さんに任せたがっているようだった。

不必要と思えるまでに状況報告を徹底させたのは、この目論見もあったのだろうか。

部長の中ではもう、答えは出ているように思えた。

「そうですか：わかりました」

僕はそれだけ言って、喫煙所に向かった。

喫煙所には小林さんがいた。

「小山」

僕は誰とも顔を合わせたくなかったが、話しかけられてしまったのは仕方が無かった。

「その顔だと、部長から話聞かされたみたいだな」

「はい：」

僕はどんな顔をしていいのかわからず、何も言えなかった。

小林さんとしても尻拭いをさせられ、いい気分ではないかもしれないなかった。

「今回の案件、お前はよくやったと思うよ。初めて任された仕事でこんな大きなプロジェクト、普通はここまでできないぜ。色々勉強になっただろう？あそこのお客さんは特に、向こう側の情報認識にズレがある事が多いみたいだからな。そこら変も特に確認しておかないとな」

小林さんは言ってくれた。

「：はい。ありがとうございます。小林さん、尻拭いさせるような形になってしまってますいません」

「や、気にすんなよ。お前がほとんど調整してくれてたみたいなんだからな。後はまあ、上手くまとめるさ」

午後は未申請だった交通費の申請や総務へ提出する書類の整理をした。

ここ数か月分、溜まってしまった書類は結構な量になっていた。

書類の整理に午後一杯を費やし、明日からの有給を申請して定時に会社を後にした。

定時に会社を出るのは久しぶりだ。外はまだ、少し明るかった。

なんだか忙しかった日々が嘘のようだった。

どこかに寄って帰ろうかとも思ったが、一人で寄るような店は知らなかった。信人を誘おうかとも思ったが、今日は会社で見かけなかった。

そういえば実家に帰ると言っていた。もしかしたら、まだ戻ってきていないのかもしれない。

僕は地元の駅で降り、コンビニに寄った。

あまり一人で酒を飲む習慣は無かったが、ビールとつまみを買った。

いざ早く帰って来ても、やる事が見当たらなかった。

これから一週間、何をすればいいだろうか。

とりあえずテレビをつけてみたのだが、久しく見ていなかったのでものをやっているのか全くわからなかった。

バラエティー番組はつまらなかった。お笑いがブームのようだったが、少しも面白いと感じる事はできない。

ニュースは暗い話ばかりで気が滅入りそうだったのでやめた。倒産、不祥事、殺し……世の中は問題が山積みのようにだった。

適当にチャンネル回していると、外国の風景が流れてきた。どうやらドキュメント番組のようだった。

何となく見始めたが、なんだか止まらなくなってしまった。

おそらくヨーロッパの田舎の方だろうか。

とある家族が自宅の裏の古くなった巨木を試行錯誤しながら切り倒すまでの過程を淡々と放送していた。

自分が生きている社会とは全く違うルールや価値観の中で生きている人たち。

当たり前だけど、なんだか不思議な気がした。

最終的には、巨木は切り倒された。

その木は何十年にもわたり、家を強風から守ってくれた大切な木だったそうだ。

「かわいいそうだが仕方が無い」と、一家の主は言っていた。
かわいそうだが仕方が無い。

何故だか僕は、この言葉に身震いした。

昔はこんな番組見たりした事はなかった。

何が楽しいのかはわからないのだが、僕は目が離せなかった。

携帯電話の着信メロディーが流れて、我に返った。

最近では着信を示すメロディーが流れると、会社からではないかと疑ってしまう。

しかし携帯電話を開くと、信人からだった。

「あ、お疲れ様です。今大丈夫です？会社ですか？」

「いや、もう家だよ。どうしたの？」

「僕今実家から帰って来たんですけど…小山さん時間あります？今からお土産届けに行ってもいいですか？」

そういえば実家に帰ると言っていた。

急だったが、断る理由は無かった。どうせ後一週間、時間は山ほどあるのだ。

「大丈夫だよ。じゃあ家で待ってたらいい？」

「はい、三十分ぐらいで着けると思うんで」

信人は本当に三十分で到着した。

「どうも、これお土産です。どうぞ」

「ありがと。上がってく？」

「いいんですか？じゃあちょっとだけ」

「どうぞ。ごめん、自分だけ飲んじゃってて」

信人は車で来たようで、なんだか申し訳なかった。

「なんか久しぶりだな」

「そうですね…こっちはどうでした？こんなに早く帰宅してるってことは、例のプロジェクトまとまったんですか？」

いきなり痛いところを突かれた。しかし隠しても仕方なかったので、素直に打ち明けた。

話を聞く信人の顔は、次第に曇っていった。

「そうですね…残念でしたね。こんなタイミングで小山さん外すな

んで、部長何考えてるんでしょ」

「…まあ小林さんなら上手くまとめてくれるだろ。しかし、やっぱり難しいなーこういうのって。お前ならもっと上手くできただろうに」僕は信人にそう言ってもらえた事が嬉しくて、少し酔っているせいもあり涙腺を刺激されてしまった。悟られないよう、精一杯明るく言った。

「いや、僕は無理ですよ。そういうのに取り組めない人間なんです」「そういえば、そっちは？」

「ええ…実は…」

なんだか言いづらそうにしていた。僕に気を使っているのだろうか。「久しぶりの実家、どうだった？」

「実は…祖父が死んだんですよ」

「あ…そうなのか。ごめん、休暇だとばかり思ってた」

「いえ。僕じいちゃんには随分世話になったんですよ。前から調子悪いつてのは知ってたんですけど、中々会いにいかなくて…。僕が戻ったときはもう意識無くてね、ベッドの上で苦しそうにしていたよ」

信人は淡々と話す。僕は何となく、家族の遺体が並べられた霊安室を思い出していた。

「でも僕が病室について、何て声をかけたらいいかわからなくてただ顔を見ていた時、一回だけ意識が戻って…ガッツポーズしたんですよ、僕を見て。弱って腕なんか細くなっちゃって。だけど…」

「だけど、あんな力強いガッツポーズ、僕初めて見たんです」

しばらくたわいもない話をしていたが、ふと会話が途切れた。
気がつくのと、信人が来てから数時間が経っていた。

「信人、時間大丈夫？明日仕事だろ？」

僕は口を開いた。

「大丈夫ですよ。ねえ小山さん……」

「ん？」

「鳩、見に行きませんか？」

僕は信人が一瞬何を言っているかわからなかったが、頭の中で何度か反復し、理解した。

「鳩？この時間に？よく知らないけど鳩って夜は寝てるんだろ？」

「わかってますよ。どうせ小山さん時間持て余してるんでしょ？」

断る理由は無かった。

僕は着替えて、表に止めてあった信人の車に乗り込んだ。

思えば二人で出かけるのは久しぶりな気がした。

そういえば何週間か前、鳩を見に行く約束してたっけか。

野生の鳩は、通常夜に目にする事はできない。夜は活動していないからだ。

僕の家から20分ほどのところに鳩舎があり、信人はそこに向かっているのだろう。

自分の家の近くに鳩舎があるなんて事は全く知らなかった僕は驚いたものだ。

レース鳩ですね、と以前信人は言っていたが、レース鳩というものがどういものであるか、僕は全く知らなかった。

もともと車どおりの少ない道路に加えて週頭の夜ということもあり、車通りは少ない。二車線の道路はほぼ無人だった。

時折立っている街灯が勢いよく後ろへ消えていった。

「僕ね」

信人が口を開いた。

「僕、ガキの頃、自分の事天才だと思ってたんですよ。何でもできると思ってた」

信人ならあるいは、そんな子供だったかもしれない。

一呼吸おいて、信人は続けた。

「でも、全然そんな事ありませんでした」

わき道にそれて少し車を走らせると、鳩舎が見えてきた。

鳩舎の周りには何も無かった。

道路を挟んで向かい側は住宅地建設の波が津波のように押し寄せつつあるようだったが、鳩舎の側はまだ手がつけられていない状態で荒地が広がっていた。なんだか不思議な光景だった。

月がきれいな夜だ。

鳩たちは寝静まっているようだった。

「この鳩たちって、どんな気持ちなんだろう。何考えてるんだろうな」

僕は何気なく口にした。

「何も考えていませんよ。鳩はバカなんです。そこがいい」

程なく信人は鳩に見入り始めた。僕は仕方なく道路の向かい側に渡り、缶コーヒーを買ってきた。

季節の変わり目で、少し肌寒かった。

缶コーヒーは暖かかったが、しかし味はよくわからなかった。

「小山さん」

「ん？」

「僕はね、将来どこかの田舎で鳩たちと暮らすのが夢なんです」

「それ、叶えたらいいよ」

僕は本気でそう言った。

僕は手持ち無沙汰になって、夜空を見上げた。

ゆっくり夜空を見上げたのなんてどのくらいぶりだろう：星座のこ
となんて全然わからなかったが、なんだか新鮮だった。いつも僕ら
の上で輝いているはずなのに。

僕が星座を見上げていたその時、鳥の羽ばたきが聞こえた気がした。
夜に？

僕は不思議に思っただけで、目を凝らした。

空には星が輝いているだけで、羽ばたいた主は見当たらなかった。

「なあ、信人。今…」

「え、なんですか？」

「あ、いや：なんでもない」

きつと、鳩が飛んで行ったんだ。僕は何故だか、そう思った。

僕は夜空に白い鳩が飛ぶ様子を思い浮かべ、白い鳩が描く軌跡を思
い浮かべた。

僕はもう一度夜空を見上げたが、やはりそこには何も見えなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5464j/>

軌道

2010年10月26日08時11分発行